

はじめに

小澤美代子編著『〈タイプ別・段階別〉続 上手な登校刺激の与え方』(2006)が出版されてから、早いもので15年の歳月が流れました。さらに、その母体となった小澤著『上手な登校刺激の与え方』(2003)からは、18年の時を経ています。しかしながら、いまだに不登校は増加傾向を示しているというのが現状です。

登校刺激を控えるということが全盛の時代にあって、正面から登校刺激に向き合ったこれらの著作はまさに刺激的なものでした。その中で、不登校のとらえ方として、「心理的要因(本人要因)」「教育的要因(学校要因)」「福祉的要因(家庭要因)」という視点を提供し、それぞれを「慢性型」と「急性型」に分けることで6つのタイプ分けを行いました。また、不登校の経過と回復過程を〈前兆期〉〈初期(不安定期)〉〈中期(膠着期)〉〈後期(回復期)〉〈社会復帰(活動期)〉の5つの段階に分類し、それぞれのタイプのどの段階で、どのような登校刺激を与えるかを事例を通して論じました。これらの不登校に対する知見は、不登校対応への道標を示したと言っても過言ではないでしょう。

本書は、この2つの著作を受け継ぐものとして企画されました。前著作からは時代の変遷があり、不登校の内容にも社会状況にも大きな変化が見られます。また、この2つの著作は主に個別臨床を中心にした、学校心理学でいう三次的援助サービスの実践です(個別臨床的には、これらの内容は現在でも十分に

通用するものだと思っています)。現在でも個別臨床の重要性は変わらないものの、学校での実践におけるウェイトは、予防開発的・集団的側面を重視した一次的援助サービスへと移ってきていると言えます。さらには、コロナ禍の経験や情報技術の急激な発展、「チームとしての学校」が強調される中での学校内外での連携・協働など、学校の在り方そのものが問われる状況も出てきています。それらは当然のことながら、不登校のとらえ方や対応にも、大きな変化をもたらしました。

このような現状認識の中で、私たちは本書において再度、不登校への基本的・標準的な対応を明確にしたいと考えています。

それは、2つの著作において不十分であった予防開発的・集団的側面への取り組み、発達障害やその二次障害への取り組み、さらにはインターネットやゲーム依存への対応、ICT教育が推進される中でのそれらの不登校対応への積極的活用などに関して取り上げる必要があるからです。

その根底には、文部科学省の「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」（2019年10月25日）の中にある「不登校児童生徒への支援は、『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく」という「支援の視点」は当然の前提としつつ、「不登校の時期が（中略）学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在する」の部分にも着目し、学校教育は本来、子どもの自立を促進する場であるという立ち位置を明確にすることで、そのリスクに対処したいという思いがあります。

本書をお読みいただくにあたり、まずその構成について述べ

ておこうと思います。

第1部と第2部の最初にそれぞれ【ナビゲート】を入れて、私たちの視点がある程度明瞭にしました。さらに各章ごとにも【ナビゲート】を入れています。これは、多くの執筆者からなる本書を、少しでも読みやすいものにしたという編者の試みです。

第1部では、小澤（2003、2006）をもとにした要因別タイプ分けから始まる不登校への個別臨床的な対応を【不登校への基本対応】としてまとめました。

第2部では、それを発展させて【不登校への標準対応】としてまとめました。「標準対応」とは医療分野で使われる標準治療から取った言葉です。標準治療とは、ある病態に対するエビデンスに基づいたその時点での最良の治療ということです。つまり、【不登校への標準対応】とは、一般的に不登校への対応として推奨される、その時点での最良の対応方策ということになります。

【基本対応】と、それを包括する【標準対応】を見ていただければ、不登校の予防、また実際にかかわったときに、どのような点に注意して対応していけばよいかという一般的な対応の流れは、ほぼつかめるのではないかと思います。

学校教育がセーフティネットとしての機能を十分に果たし、子どもたちの自立と成長を上手に支援できる場となることを願っています。本書がその一助となれば幸いです。

小澤美代子 田邊昭雄